

グループ活動をして

私は環境エンリッチメントとカラス・アラスカのグループで活動しました。Zoomで実習となるとどうなるのかなと緊張しましたが、動画を見たりやさしめの論文を読んだり、本で知ったことを共有したりととても楽しかったです。

【 環境エンリッチメント 】

最初環境エンリッチメントと聞いて、なんのことか全く想像が付きませんでした。「動物福祉の立場から飼育動物の`幸福な暮らし`を実現するための具体的な方策」という説明を頂いてもピンと来なくて自分の知識の狭さを感じましたが、噛み砕いて教えて下さって何とか理解することが出来て良かったです。飼育動物が本来の暮らしができないと、うつ状態や異常行動が起こると知り、自分は動物園と聞くと楽しい場所だと思っていたけど、動物から見ると息苦しい場所なのかもしれないと違う視点を得ることが出来ました。自粛期間は毎日同じような生活を続けていると面白くなくて何もしていなくても疲れてしまうことがあったので、飼育動物もこんな風に毎日を送っているのかななど考えることもありました。動物園に行くことができたなら飼育環境の工夫の仕方やエサの種類、与え方をいろいろな動物で見てみたいなと思いました。霊長類などの環境エンリッチメントの事例は沢山あるけど、鳥類は探してもあまり出てこないのどうすべきか考える必要があるなと思いました。時間に余裕がある時に調べたり考えたりできればなと思いました。

【 カラス・アラスカ 】

今までアラスカのことを知る機会がなかったけど、日本とは全然違う空気の国で同じ地球に住んでいてもこんなに違うものなのだなと思いました。特に北の方の国は虫がいなくて勝手に思い込んでいたので、アラスカの夏に蚊が多いと知り驚きました。動画を調べてみると蚊が大群で飛んでいて、画面越しでも鬱陶しくなりました。アラスカの神話についての話ではカラスが良い印象でとらえられていることが多かったことも驚きました。私が調べたのはカラスが暗い世界から箱を開けて星・月・太陽ができたという神話です。月の誕生などよく分からないことに対して意味付けをしたいのではないかという意見が出た時、いろんな人の意見を知ることが大切だなと思いました。カラスは頭がいいと言うのは知っていたけど、道具を使うものもいて凄いなと思いました。また、日本では都会にもハシブトガラスがいるけど、他の国では都会にカラスがいることは珍しいことだと知って他の国のカラスについても知りたいと思いました、最初はカラスが悪い印象だったけど、それは思い込みだったのだなと思いました。今ではよくカラスの鳴き声がきこえるようになり、友達からも「カラスおるで。」と教えてくれるようになりました。

チンパンジーや一部のカラスの道具使用について知ることが出来たので、もっと他で道具使用をしている動物はいるのか気になったので調べてみたいと思いました。それに関係す

るのかは分からないのですが道具使用をしている動物の脳の大きさや目の見え方について
きょうみがでてきたので、グループ活動ができて良かったです。知らないことに触れられて、
考えが変わったグループ活動でした。

八月までのオンライン実習を終えて

2月に最初の実習を行ってから約5か月間のオンライン実習、調べ学習で私は主に環境エンリッチメントについての知識を深めた。初めのころのメモを見返してみると、聞こえてきたことを長々と書き連ねるだけで要点を絞り切れていなかったものが多かったが、最近になると少しずつではあるが自分なりにわかりやすい長さや単語で区切り、疑問とともにまとめることができるようになったように見える。

・考えが変わったこと、興味を持ったこと

私は、オンライン実習では環境エンリッチメントのグループに参加させていただいた。環境エンリッチメントは、ただ動物の本来の生息環境を再現することの意味するのではなく、本来の行動パターンを引き出せれば人工的なものでも代用できること、動物だけでなく来園した人にも楽しんでもらえるものでなくては意味がないことを実習の度に感じた。それこそ初めは群れで飼うこと、採食時間をのばすこと、飼育スペースを広くすることしか思いつかなかったが、調べるうちに動物園によって本当に様々な工夫の下で動物たちが飼われていることを知った。採食時間をのばすと一括りに言っても、皮をむかないといけないなど食べるのに時間がかかるものをあげる方法と、フィーダーによって餌が手元に届くまでにかかる時間を増やして動物に自ら考え行動させる方法があることがわかった。特にフィーダーに興味をわいたため、実際に紙素材で作ってみると、構造を考える段階から難しく、一つ目に考えたものは失敗に終わってしまった。そこで二度目は、人が比較的簡単に作れる単純な構造で、動物にとっても複雑な操作を必要としないもの考えた。フィーダーを実用化するには、これだけでなく、強度や安全性、コストなど考えなければならないことが多く、自分の理想と現実とはやはり違うものなのだと考えさせられた。

第一回実習の際、私は五期生の先輩方の発表の精度にただただ驚き、オンライン実習では自分の発表に対する質問には堂々と自信をもって答えられるように深く広く調べておこう、相手の発表に対して新しい視点から疑問を見つけようという目標をもって取り組んでいた。しかし、いざ発表の時になると全く予期していなかった角度からの質問があったりメモを取るのに必死になってしまったりと、目標を達成できたとは言い難いまま終わってしまった。どんな質問にも答えられるようになるには、調べた情報の量だけでなくその場で意見や考察を組み立てられる力が必要なのだと思う。メモを取るのも、最小限自分がわかる程度にして、パワーポイントや図、相手の言葉から得る情報量を増やしたいと思った。今回の実習を通して、採食時間を延長するための環境エンリッチメントと鳥類のコミュニケーションについて、特に新しく興味を持つようになった。次に動物園に行けるのがいつになるかはわからないけれど、学校での課題研究の時間も活用して論文を読み、さらに興味や理解を広げようと思う。最初のレポートに書いたように、自分の発表が、相手に面白いと思

ってもらえる新しい発見のあるものになるよう、できる限り多くのことを吸収して納得できる成果を出したい。

研究とは

僕たちは、今までそれぞれの探究を進めてきました。それぞれの師についてそれぞれの好きなものを見つけてきました。今回の発表は全員の調べたこと、学んだことの全てが集約されていたと思いました。面白かったのはもちろん。個性も出ていました。こんなに楽しい発表は初めてでした。

僕は、発表の時、どうやって誤魔化すかばかり考えていた自分がすごく残念に思いましたが、それはまあ置いておきます。今回の発表は僕にとって、敵でした。テスト直前に二つの発表を控えていた僕は、勉強も発表もどっちつかずにしてしまったのです。研究と言えるほどのことはできませんでしたが、楽しかったです。僕の武器は、話の地味な上手さだと思います。今回はうまく話せた気がしません。それはつまり、完璧に失敗したということです。お恥ずかしい話です。

死生観とアラスカとカラスを学んできた中で、日常とは全く違う様々なことを学ぶことができました。

新しいことを学ぶことはすごく楽しいことだとわかったことが何よりの成功だったと感じています。死生観については、結局結論を出せずじまいになったのが悔しいです。もっと事例を集めて今後結論が出ることに期待しています。チンパンジーが死に対してなにか感じるのか、まず死という概念的な状態を理解しきれているのか分からない時点で、難しいとも思いました。

そこで、僕が考えたのは、元々チンパンジーに死という概念がなく、あるのは食料かそうではないかという二つの分別なのではないか。という考えです。彼らが子殺しを行って食べる。そのことも元々子供のことを食料だと考えていれば行われてもおかしくないのではないかと思います。動かない仲間を見ても普通食料にしようとは考えない、だからまずは普段通りに接するのですが、普段よりも長くやっても反応がない。ならそこで一時的に離れてもおかしくないでしょう。何度もそうやって繰り返していれば普段よりも接触の回数は増えるでしょうし、仲間の中でも普段と違う状況に緊張して接触も増えてしかるべきですし、正直チンパンジーに期待しすぎだと思います。まあ、否定するに足る根拠はないのですが、ちょっと違和感があったな、と思っただけです。

そんなことは置いておいて、アラスカの神秘について考えて行きましょう。アラスカは美しい自然が残っています。地球最後の大自然と言ってもいいほど広がった自然は虫も獣も大の苦手とする僕もすごく感動できるものでした。しかし、そのアラスカにも人の手は徐々に入り込んでいきます。生態系を学ぶ中で非常に大切なことが詰まっているのがこのアラスカなのだ分かりました。冬も夏も形を変えて生き物たちが必死に生きる姿はすごく面白かったです。

カラスはすごく面白い生き物でした。彼ら独自の生態が人間目線で見ると不思議に思えま

した。これを書いている今もカラスは近所で鳴いているのですが、熱中症が心配ですね。黒いのでさらに暑そうだと思います。でも、この実習で学んだ限りだと、彼らしか知らない避暑地にでも行っているような気がします。カラスは非常に面白い生態をしているので、ちょっとだけなら今後も見てもいいかなと思います。積極的に見るほどハマれなかったのが残念でした。

レポート課題

この三か月間のグループ活動を通して、後頭葉は視覚を司り、頭頂葉は運動系と結びが強いといった脳のどの部位がどのような働きをして、身体を動かしているのかなどの脳と身体の機能との結びつきは完璧ではないけれど大体のことは分かったので心と身体、心と脳の関係などについても知りたいと思った。また、当初は小動物が好きでこの実習に参加したけれど脳について学び、霊長類にかなり興味を持った。今後の実習で観察することが出来るかわからないけれど、もし可能であれば霊長類も視野に入れたい。そして発見は多々ある。まず、人は脳を損傷して身体に異変が起こっても案外その異変には気付かないということに気づいた。症例を読み進めるにあたって何か自分の中で違和感があり、その正体がわからなかったけれど、乾さんが風邪をひけば人は自分が風邪をひいていることに気づくのに脳の損傷による身体機能の障害には気づきにくいということを仰っていて私が症例の中に出てくる患者さんに対して不思議に思っていた疑問が幾分か解決した。けれど、風邪よりも日常生活においてかなりの不自由を被っているのにも関わらず、なぜ気づかないのかはすごく疑問に思う。そして、脳の損傷は単純なものではなくて同じような部位を損傷しても何種類もの障害が起こるので、患者さんごとに症状が違うということが分かった。言葉では言い表せないほど、脳の複雑さ、人間の機能がいかに高次なものであるかということに気づかされた。また、環境エンリッチメントの発表を聞き、動物にとっての心地よい環境づくりの提案を考えていて素晴らしいと感動したのと同時に私もグループ活動を通して学んだことから自分が生み出せるものはないかと考えさせられた。まだ見つかっていないけれど今後の実習で見つけていきたい。全く違うことを学んでいても相手から気づかされることはたくさんあるということを発見できたと思う。最後に、私のグループには高校生が私以外にいない刺激し合える関係ではなかったかもしれないけれど、私は学部生の方々や先生から多くの学びを得ることが出来たので脳のグループで三か月間、活動してきて本当に良かったと思う。また、全てではないけれど、他の班の発表を聞き、何かしらの動物についてかなり詳しくなっていたように感じたので八月からの実習で動物園に足を運んだ際に、もっと教えてもらいたいと思った。

グループ活動の感想

私は、「環境エンリッチメント」と「法」の2つのグループ活動に参加して、色々と新しいことを知ることができて楽しかったです。

まず、環境エンリッチメントのグループ活動を通して、動物園の見方が変わりました。この活動に参加する前は、環境エンリッチメントという言葉すらも知らず、動物園に行った時も、動物をただかわいいとしか思っていないませんでした。今回、いろんな動物園や施設の環境エンリッチメントの取り組みを知り、動物の立場に立って考えることの難しさを感じました。動物のためだと思っていなくても、それが動物の幸せにつながるとは限らず、野生に近い環境を作るのにも人間側のいろんな問題が絡んでくるので、その分たくさんの方の労力や時間がかかることを知りました。先日、実際に天王寺動物園に行ったのですが、これまでは全く意識しなかった環境エンリッチメントに目が行くことから、自分の考え方の変化を感じました。

実際の動物園の状況を自分の目で見てみて思ったことは、飼育スペースの狭さと暑さです。仕方ない部分もあると思うのですが、全体的に飼育スペースが狭いように感じ、縦のスペースをもっと活かしたりできるのではないかと思います。さらに、ほとんどすべての動物が暑さにやられて、日陰から動かないという状況だったので、どうにか暑さを抑えて動物たちが動いているところを見られるようにならないかなと思いました。動物園の資金状況もあり難しいことも多いと思いますが、多くの動物園に環境エンリッチメントの取り組みが広がって、動物園の動物たちがより幸せに暮らせて、動物を見に来るお客さんも今よりもっと楽しめる環境になっていったらいいなと思います。また、このグループ活動の中でリカオンについて学べたのでよかったです。リカオンを好きになり、リカオンのことをもっと知りたいと思っているので、これからも自分でどんどん調べていきたいなと思います。

次に、法のグループの活動を通してでは、日本の法律の遅れている状況を感じ、このままではいけないと強く思いました。日本国内の昔と今で比較すると、動物実験に対する規制はずいぶん厳しくなっているし、動物実験自体も減ってきているけど、それでもヨーロッパやアメリカの法律と比べると、とても遅れているのを感じました。私は、このグループで動物実験について学んで、日本の法律にずいぶん抜けがある状況を知ったけれど、このグループで学んでなかったら全然知らなかったと思うし、日本の動物愛護法を懸念したりしなかったと思います。そのくらい日本では動物実験に対する問題意識が低く日本の現状を知っている人も少ないから、募金も集まらなくて公共団体の活動が限られてしまうという悪循環が起こってしまうのだと思います。今の時代はネットを通じてだれでも情報を提供できるので、積極的に問題提起していくことが必要になってくるのではないかなと思います。私もこのグループで学んだことをどんどん広めていきたいです。

最後にすべてのグループ活動を通して、今まで知らなかったことを知ることができたり、

1つの問題に対してのいろんな人の意見を聞いたりできて、とても貴重な経験になりました。また、今まで以上にもっともっとたくさんの動物について興味を持ち、将来も動物に関わる仕事に就きたいと思ったので、これからもいろんなことに興味関心をもって自分なりに調べていきたいです。

グループ活動を通して

私はカラスカのグループで活動させていただいて、今まで知らなかったことや考えたこともなかったようなことをたくさん学ぶことができました。

まず、実習の前半で行ったアラスカについては、自分とは全く異なる生活を営むアラスカに住む人々のことや、今アラスカで実際に起こっている問題について知ることができました。アラスカでは、数少ないものの今でも狩猟採集をして暮らしている人がいて、その地域ではみんなで協力してサーモンやカリブーなどを獲るため人と人とのつながりがとても強いということや、サーモンやムースをお金に換えたいというアメリカ政府と、現地の人々との価値観の違いから起こった問題があるという話が印象に残っています。また、サーモンから繋がるものについてメンバーで話したり、アラスカでの石油掘削について、そこから生まれる変化や、どのような影響が人や生態系に表れるか、ということを考えたりしました。中でも一番興味深かったことは、アラスカに伝わるワタリガラスの神話です。昔から多くのワタリガラスの神話が伝えられていて、知っている人々や地域に重要な意味をもたらす神話にワタリガラスが多く出てくるということは、ワタリガラスは人々の崇める対象であり想像力を掻き立てる動物であったと考えました。

次に、実習の後半で行ったカラスについては、いつも家の周りでたくさん見ていたにもかかわらず知らなかったことについて多く知ることができました。緊急事態宣言が解除されてからほとんど毎日、家や学校の近くや通学路で、何羽カラスがいるか、面白い行動はしていないか、などを観察して、今まで存在は知っていたものの見分けることができなかつたハシブトガラスとハシボソガラスを見分けることができるようになって嬉しかったです。しかし、ハシブトガラスしか観察できなかつたので、機会があればハシボソガラスも見てみたいのです。また実習では、カラスによる被害について、農業被害額においてカラスはイノシシとシカに次ぐ第三位（16億円）だということを知ってとても驚きました。私たちの身の回りでもカラスによる被害はたくさんありますが、対策としてキラキラしたものや黄色いものを付けたとしても、すぐに効果がなくなってしまう、被害が多いのも納得できます。カラスについて最も興味深かったことは、貯食です。最終発表で二つほど実験を紹介させていただきましたが、カラスやカケスは未来や過去のことを考えて使うことができる動物であり、そのようなことができるのは他にヒトとチンパンジーほどだと聞いた時には、改めてカラスやカケスは賢いのだなと感じ、どうしてほかの鳥や動物と比べてこんなに発達しているのだろう、と興味がわきました。また、ニューカレドニアガラスやハワイガラスによる道具使用も、様々な条件がそろった上でできたことであり、興味深かったです。私は、この実習を行う前までは、カラスに興味はあつたもののカラスと目を合わせるのが怖いという気持ちがあつたのですが、観察や実習でカラスの知能の高さを知ることができ、観察や実習がとても楽しかったです。また、カラスカのグループで行っていた、実習毎自分

の気になる動物について調べたことの発表では、カラスのことだけではなく多くのおもしろいことを知ることができました。これからも今まで見ることができなかったカラスのディスプレイを観察することができればいいなと思いました。

ホウ（法）！動物実験を考えようプロジェクトを終えて

私は今回のプロジェクトで、日本と海外の動物実験に関する法律や動物虐待などの事例について学び、最後にグループの皆で、現在の日本の動物実験の取り決めで改善する余地のある内容があるかどうか、また、動物実験は良いか悪いかについてディスカッションをした。

まず、欧米では動物実験をするのに資格を取得する必要があるのに対して、日本には、最近では、独自のライセンスの取得を義務づけている大学などの研究機関が増えつつあり、「実験動物技術者認定」という、民間資格もあるが、国単位の免許制度がないことに驚いた。また、日本で、器物損害罪の法定刑は「三年以下の懲役又は三十万円以下の罰金若しくは科料(刑法 261 条)」と定められている。一方で、現在の動物虐待罪の法定刑は「5 年以下の懲役または 500 万円以下の罰金」と定められており、2019 年に動物愛護法が改正されるまでは、動物虐待罪の法定刑は「2 年以下の懲役または 200 万円以下の罰金」と定められていた。このことを受けて、つい一年前までは、命あるものに危害を加えても、その割には軽い罰で済まされてしまっていたのだと知り、衝撃を受けた。ちなみに、アメリカでは、動物虐待者には「多大な罰金かつ最大 7 年の懲役」が課せられているそうだ。これらのことから、日本では動物の命に対しての意識が他国よりも低いめなのではないかと感じた。この意識の低さが、日本が「動物愛護後進国」と呼ばれる一因になってしまっているのではないかとも思った。動物実験に関して、動物福祉のためによりよくしていかないといけない部分はたくさんあると思う。しかし、まずは、根本的なところで、人々の動物愛護への意識の向上をはかる必要があると思う。意識を変えれば考えも変わるし、そのことによって、動物虐待の件数も減少していくと思う。そのためには、改正動物愛護法のように動物虐待への罪を重くしたり、動物の扱いに関する規則をもっと厳しくしていけばよいのではないかと思った。

今回の活動を通して、動物実験はあまり行うべきではないと思った。しかし、私たちは動物実験を通して開発された製品をたくさん使っていて、たくさんの恩恵を受けているため、人間が豊かな生活を求める限り、今のままでは、動物実験を完全になくすことはできないと思う。それでも、動物に与える苦痛を最小限に抑える必要があるし、あまりにも実験動物の身体への影響が大きすぎるものは控える必要がある。グループの他のメンバーから、実際に動物を用いずに、今までの実験、臨床データから薬品などが実験動物、人体に及ぼす影響をコンピュータでシミュレーションすればよいのではないかという意見が出ていたが、そのような技術が開発されれば、犠牲になる動物数も減るはずだ。この、コンピュータシミュレーションは現在実験段階で、どの程度まで実験が進んでいるのかといった情報はあまり多くは公開されていないそうだが、また、知れる範囲で、この技術についても調べてみたい。

全体発表の感想

池山さんの「ホウ！動物実験を考えようプロジェクト」を通し、動物実験に関するたくさんの知識を学びました。この実習を始めたばかりのころはなんとなくやっつけてはいけないものという認識でしたが、日本国内外の法律及び倫理の観点からどこがダメでどこが良いのかを詳しく知りました。結論として海外の現状に比べて日本は遅れていると感じました。例としては民間の資金援助や実験を禁止する法律の少なさが挙げられます。国だけでなく、民間の人にも意識される必要があると感じました。

続いて自分の発表で話したコンピュータシュミレーションについてです。もともと存在を知っている程度でしたが発表のための調べを通して想像よりも有意義なものだと感じました。調べるほど動物実験を減らすことができる以上のメリットがたくさん出てきました。例えば、絶滅危惧種の動物を扱える点や製造する前の薬品を使うことができるという点です。デメリットとして現在の技術が追い付いていないという点がありますが、実際にオックスフォード大学がコンピュータシュミレーションの実験を始めていることから実用化は案外遠くないのではないかと思います。

また発表時にもらったコンピュータシュミレーションで人間を実験したら良いという意見は、本当にそのとおりであると思いました。動物は動物で得たい情報がありますが、結果的に人間につなげるならば動物を介す必要はないとよくよく考えるとそう思いました。

しかし、人間の体は他の動物に比べて複雑なので、コンピュータに情報を取り入れる段階では動物よりも難しい点があるのかなと考えました。

僕視点での結論としては

動物実験あり



コンピュータシュミレーションの実用化の準備



それまでの実験動物の削減（海外を参考）



コンピュータシュミレーション実用化成功



動物実験撤廃

という流れになりました。

グループ活動を通して

① グループ活動を通して考えが変わったこと

僕は動物実験について日本の法律などを学びながら考える活動を4月から池山さんにいろいろなことを教わりつつしてきました。その活動を通して日本の法律の仕組みや法的三段論法について学び、その知識をベースとして日本の動物実験に関する現状や問題点、法律の改正によって何が変えることができている、何を变えることができないのかということなどを考えたり調べたりすることができました。動物実験に関する日本の法整備が欧米に比べて遅れているということは今まで全く知らなかったし、この活動がなければ知ることもしなかったであろうことを今回知ることができ、世界観が広がってとても嬉しいし、この問題についてこれからも考えていきたいなと思うことができました。

② 他のグループの活動の発表を聞いて

他のグループの活動の発表はどれも興味深かったのですが、特に印象に残ったのが脳に関するグループとエンリッチメントのグループです。脳については正直中学校の保健体育で学んだことぐらいしか知識がなかったのですが、図を見せてもらって説明してもらうことでとても理解しやすかったし、人間の脳の奥深さが分かり、分からないことがまだまだいっぱいあるということが分かりました。また、以前小説で生まれつき人の顔だけが判別できないという登場人物がおり、本当にそのような人間などいるのだろうかという疑問に思う気持ちがあったが、今回の発表を聞くことでそのような人が実在しているということが分かり疑問を解決することができました。またエンリッチメントのグループは自分たちでフィーダーを作っているなどとても面白そうな活動をしていて楽しそうだなと思いました。フィーダーは壊れてしまったりはいけなかったりなどの難しい条件がいっぱいある中で工夫して作っているのは本当にすごいことだなと思いました。

他のグループもとても面白く、興味深いなと感じました。カラスカのグループは自分たちに身近でどこにでもいるカラスについて真剣に観察したりしていてすごいなと思うとともに身近にいながらもあまり知らなかったカラスの生態について知ることができ、とても良かったです。死生観のグループは、自分自身がまだ若いのもあってなかなか考えられないようなことを人間だけでなく他の動物についても考えたりしていて難しそうな内容なのにすごいなと感じました。また、中間発表の時に死後のことを考えない宗教は世界でも日本の神道だけだと言っておられたことがとても意外であるとともに、面白いなとも感じました。昔、家でハムスターを飼っていたのですがもしかしたらあの子も死について認識していたのかもしれないなとも考えました。

③ まとめ

自分自身のグループでは調べたりディスカッションしたりすることで主体的に学びを深めて自分の世界を広げることができ、他のグループの発表を聞くことで自分だけでは一生知ることがなかったかもしれないような面白い話を聞くことができ、この数ヶ月で本当に自分自身の世界が広がったように感じました。コロナの影響でこれからの活動がどうなるのかは分からないけれど、また楽しみたいなと思いました。

8月16日レポート

今回僕は、カラス、アラスカグループの実習に参加して自分自身がいろいろと以前と変わったことがあったので書いていこうと思います。

まず、実習の最初に毎回板原さんのグループでは各回一人ずつが他のメンバーに対して質問をするのですが、回を重ねていくうちにメンバーがお互いにどんな人なのかわかってきて毎回楽しみでした。

前半のアラスカ実習では、実習内で発表したり話題を提示したりするために事前にアラスカに関する本を読んでおくことが宿題になっていました。僕が読んだ本は「森と氷河と鯨」という本で、中でもリツヤ湾沖地震について興味を持ち調べ、リツヤ湾の地震の影響で、東日本大震災の10倍以上にも及ぶ500メートルもの高さの津波が起こったという事実に驚きました。他にも筆者のアラスカでの生活や経験が書かれており、すらすらと読むことが出来たので皆さんにも読んでみることをおすすめします。実習の内容では、アラスカ先住民の生活や、カリブーについて学びました。中でも先住民のサーモンの狩猟がとてもおもしろく、特に川の中に水車のような罠をしかけて、サーモンが自動的に捕れるといった狩りの方法がとても印象に残っています。

後半のカラス実習では、毎回鳥類に関する実験を調べる事が宿題になっており、実習内で毎回発表しました。僕が調べた中でも、アヒルの視覚とすりこみの関係についての実験が非常に印象に残っています。生まれたばかりのアヒルの片目に目隠しを施し、もう片方の目だけで親を認識させるすりこみを行ってから反対の目に目隠しを付け替えると、先ほど親だと認識したものに反応を示さなくなるらしいです。実習の内容では、カラスの種類、日本にいるカラス、道具使用、ねぐら、貯食についてなど、今まで全く知らないようなことをたくさん教わり、毎回の授業がとても楽しかったです。特に、日本にいるハシブトガラスとハシボソガラスの見分け方について知り、今まで全く意識していなかったカラスを観察してみたり、鳴き声を注意深く聞いてみたりするきっかけとなりました。他にも、カラスは賢い生き物だとは知っていたものの、過去や未来を考えたり出来るなど、その知能の高さに驚かされるばかりでした。

実習全体を通して、僕はカラスに限らず鳥類全体に興味を持つようになりました。それはこの実習により普段は気にもとめないようなカラスを観察するようになって、いろいろと新しい発見が出来たからだと思います。また、誰も意識しないようなことに目を向けることも重要だということを学びました。この実習は、非常に良い経験になったと思います。最後に、僕はまだハシボソガラスを発見できていないので、これからもカラスの観察は続けていこうと思います。

本発表 感想

前回の全体発表についてのそれぞれのグループの感想です。まず環境エンリッチメントのグループについての感想は、環境エンリッチメントについてほとんど致死がない状態で発表を聞いていたので、新鮮な驚きが多かったです。例えば、動物園では来客者を楽しませるためだけでなく、動物たちの生息地に限りなく近い状態にしていることや、古川さんが調べていたフラミンゴが外で飼育されている理由など様々な興味深いことを知ることができました。山下さんの手作りフィーダーのエサの取りにくさや頭の使い方次第でとれるようになっている仕組みも凄かったです。

脳のグループについての感想は、環境エンリッチメントに比べてある程度知識を持っていたので、知らなかった情報の多さに驚きました。脳のそれぞれの部位の機能はその部位を損傷することで分かることもあったり、脳のある部位が損傷することで人格が変わることなども驚かされました。その中で特に興味を持ったのは、半盲などで目が見えない人たちは目が見えていないのではなく、注意が向かなくなるということです。これは、例えば友達の影響でタピオカが好きになった時、今まで身近にあったのに気が付かなかったタピオカ店に気づくようになる現象と同じ感覚なのかなと思いました。

死生観のグループで活動した感想は、「死」の概念が曖昧なため難しいと思っていましたが、一つの事例から様々な考え方ができてどれも正解かどうか分かたないけれど、間違いでもないで面白かったです。ただ、どれだけ気を付けてもいつの間にか「ヒト」としての死生観になってしまうところが難しかったです。

カラスカのグループで活動した感想は、とにかく面白かったです。身近にいる動物なのにあまり知られていないカラスのことを詳しく知ることができたり、実際に外に出て家の周りのカラスを観察したりしていたので、実習の内容が頭に定着しやすかったです。またいろいろな鳥類の魅力を知ることができたので良かったです。アラスカについては、自分達とは全く違う環境下で様々な工夫を凝らして生きている人たちを知ることができ、環境問題などについてディベートしたことが楽しかったです。

法律のグループについての感想は面白そうだけど大変そうだと感じました。動物実験が良い例として、人の病気を治すためのワクチンが作れたり、病原菌を解明できることがあげられると思います。実際、依然見たテレビでエミューは抗体ができやすい鳥なのでコロナのワクチンを作れるかもしれないと聞いた時はエミューをもっと使って実験すればいいと思っていました。ただ、動物実験の悪い例として、動物の権利が無視されていたり、動物の命の重さが軽視されている事実を発表を聞いて知ったため、以前は動物実験に対してある程度賛成でしたが、今は日本の動物に対する法律が整うまではしばらく中止にすべきではないかと思いました。もしくはコンピューターシミュレーションの技術を発達させ、文元さんも仰っていたように「ヒト」でシミュレーションをできるようにすればいいのかなと思いました。

した。

全体の感想として、コロナ禍で動物園での実習ができなくなり、合宿なども延期になってしまったのはとても残念でした。ただ、学部生の皆さんのおかげでオンラインの形で実習が続けられることになりました。そのおかげでただ実習を受けるだけでは得られなかった知識や経験を得られることができたため本当にありがたかったです。これからの実習や、自分の人生でこれらの知識や経験を活かしていこうと思います。

高校生実習レポート

京都大学総合人間学部 4 回

横坂楓

前期に各学部生がオンラインで運営してきたゼミの最終発表が、7月26日と8月2日の2回に分けて行われた。

私が一番印象に残っているのは、当然といえばそうだが、自分自身が運営したゼミの発表である。私はずっと、高次脳機能障害について扱うゼミを運営してきた。このゼミには高校生が一人参加してくれたのだが、大学生でもハードな題材にも関わらず、彼女は3か月間休まず着いてきてくれた。そして26日には、本当に素晴らしい発表をしてくれた。どの葉(前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉)がどのような機能を担うか総括したものを発表してもらったのだが、簡潔で明快な言葉で、かつ初めて聞く高校生にも分かりやすい形で、堂々と発表してくれた。

彼女は実習初期はどちらかというと表に出るタイプではなく、ゼミでも受け身に聞いていることが多かった。だが回数を重ねて世界観が掴めてくると、どんどん自分から質問してくれるようになった。その毎回成長していく姿が、私がゼミを運営していく励みになっていた。最後に難解な内容を自分の言葉で発表に昇華させた彼女には拍手喝采である。

他の班の高校生たちも、皆素晴らしい発表をしてくれた。エンリッチメント班は実際にエンリッチメント用の遊び道具を作る人がいたし、カラスカ班は板原ワールド全開で皆楽しそうに話していたし、法グループは各々の主張を根拠を持ってしっかり発表していたし、死生観班も難しいテーマを、しっかり主観と客観を区別しながら発表できていた。学部生も高校生たちも、時間をやり繰りしながら積極的に活動できた成果がしっかり表れていた。

このような、各学部生が主体となって、学部生側が題材を提供して、半分講義っぽく知識を蓄えていきながら、自分たちで何が正しいのか、どうしていくべきなのかを考えていく、という取り組みは、コロナ禍で急ピッチで考えた策の割りには、よくできたものだったように思う。動物をこの目で観察して知ることができない代わりに、文献や書籍に当たり、各学部生の実体験を共有していくことで、動物に関する知識だったり、考察を加えていくために必要な視点を養えたのではないだろうか。

前期のゼミ方式を決めた際は、まだ動物園での実習はあきらめてはおらず、第1波が終わったところで動物観察を再開する予定だった。ただ第2波、第3波が実際にやってきて、動物園での実習は日々不可能性が増し、オンラインで実習を行うことが決定となった。本当に残念で仕方がないが、決まったからにはうまくやっていく方法を探さなければならない。前期は知識の貯蓄、考える目を養ったのであれば、後期は、高校生たちには自分自身の力で調べて、まとめていくことを求めている。調べていくためのテーマはどう決めるのか、調べ学習での学部生の立ち位置はどうなるのか、どのレベルに持っていくことを想定して

いるのか、問題は山積みだが、これもこれでどうなっていくのか、とても楽しみにしている。

カラスカ組の活動報告

京都大学 板原 彰宏

コロナウイルスの影響で例年通りの活動ができず、今回のような小さなグループ活動にせざるを得なかったわけであるが、自分は動物園での実習以上に楽しんでいた気がする。好きなことについて話すというのはどうも楽しいものだ。カラスカ組というネーミングと一緒に活動していた高校生がつけてくれた名前であるがかなり気に入っている。

最初から最後まで本当に自由に活動させていただいた。英語のサイトを題材にするくせに、わかりやすいスライドの用意もしなかった。それに怒らず、見限らず一緒に活動してくれた高校生の皆さん、本当にありがとうございます。夏以降の実習で十分ディスカッションを行うことになるだろうし、ディスカッションやアイデア提案型の活動らしい活動はほとんどしてこなかった。それよりもちょっとでも心が豊かになれるもの、初めて聞いて心躍るようなもの、なんかよくわからないけどなんか惹かれるといったもの、そういったものを1つでも見つけてくれるといいなといった考えでグループ活動をしてきた。といっても、言葉って難しい。「百聞は一見に如かず」とは本当によくできた言葉だと思う。みんな揃ってカラスを観察したり、アラスカに行きたいと心から思った。

グループ活動を計10回+ α 行ってきた。直接会ったこともない高校生と計20時間以上zoomで喋っていたと思うとどこか不思議な気持ちになる。その20時間の活動の中でいろんな話をしてきた。アラスカの暮らし、アラスカの動物たち、ネイティブと政府の対立、アラスカ北極海沿岸の石油問題、日本のカラスの見分け方、カラス科の鳥の様々な実験に加えて、毎回冒頭の質問コーナー、カラス観察報告会、アラスカに関する印象に残ったこと、面白いと思った鳥の研究や生態。特にこのグループの特徴は雑談の多さだったと思う。動物のことでもいいし、人の暮らしでもいいし、カラスを観察していて面白かった行動でもいいし、雑談の中で出てきた言葉でもいい。20時間の活動の中で何かほんの一つでいいから、頭に引かかる内容、心に残る言葉、ふと思い出す写真があるといいなと思う。恐らく、アラスカのことカラスのこと、カラスカ組に参加していなければ一生気にかけることなんてなかったと思う。ほんの一つでいいから、カラスカ組の活動で心豊かになれるものを見つけることができたならそれで自分は満足です。

本当に活動していて楽しいグループでした。通学中や授業中にカラスの声をふと意識するようになったこと、割と嬉しかったです。参加してくれた高校生・先生方本当にありがとうございました。

8月16日レポート：グループ活動を通して

京都大学 教育学部 3 回生

乾 真子

【はじめに】

新型コロナウイルスの流行という予期せぬ事態の中始まったグループ活動は、自分が想定していたよりも楽しいものだった。グループ活動のテーマとして、私は飼育チンパンジーの環境エンリッチメントを選んだ。自身の卒業研究に活かしたいという思いと、実際に高校生に手を動かして考えてもらいたいという思いからこのテーマを選択した。グループ活動を通して、全体の感想と自身が担当したグループでの活動について振り返りたい。

【グループ活動全体の振り返り】

全体的な感想として良かった点としては、例年に比べて、高校生だけではなく学部生もより楽しんで実習に参加できたことである。例年の形式では、学部生は高校生を指導する立場にあった。また、学部生はいかにして高校生の興味・関心を実現させるかということに徹していたため、学部生自身の興味がそれほど尊重されることはなかった。しかし、今回は学部生が決めたテーマの中から高校生に興味があるものを選んで参加してもらったことで、学部生自身が得意とする分野や興味のある分野について実習を進めることができた。文学部、法学部、総合人間学部、農学部、教育学部と、様々な学問を学んでいる学部生の持ち味を活かした実習ができたように思う。学部生も興味がある内容ということで、良い意味で学部生の個性が高校生に伝達していた。高校生に感想を聞くと、例えばカラスについて取り組んだグループであれば「通学途中にカラスや他の鳥を探すようになった」と言う高校生や、環境エンリッチメントでも「動物園や動物のバラエティ番組の見方が変わった」と言ってくれる高校生もいた。オンラインでの実習が決まった時には、ただインターネットや文献から知識をまとめるだけの作業になってしまうのではないかという不安があった。そのような心配は杞憂に終わり、結果ただ知識を入れるよりももっと有意義な時間となったと思う。学部生それぞれの動物の見方が少しでも高校生に影響を与え、高校生が動物や世界の新しい見方を得たことは非常に大きな意義があると思う。また、学部生と高校生がより近い立場でディスカッションをしたり、高校生同士でも考えを交流することができたのも今年の良かった点の一つである。これまでは高校生同士で議論をする機会がほとんどなく、学部生・高校生間でも例年よりディスカッションをする機会が多かった。

【環境エンリッチメントグループの振り返り】

私が担当したグループでは環境エンリッチメントについて取り組んだ。当初は対象を飼

育チンパンジーに限定しようと考えていたが、高校生とも相談した結果、各々好きな動物のエンリッチメントを考えてもらうことにした。取り組んだ内容としては、環境エンリッチメントの実践例のビデオの鑑賞や文献購読を行った。最終的には、高校生それぞれに好きな動物を選んでもらい、動物園を想定してその動物の習性を踏まえ且つお客さんも楽しむことができる環境エンリッチメントの取り組みを考案してもらった。

反省としては、実際の飼育施設を見ることができなかったことである。このような状況下で仕方がないことかもしれないが、飼育施設でどのような工夫がなされていて、どのような点が問題であるのかを意識せずに環境エンリッチメントの取り組みを考えるとというのは少し無茶振りだったのではないかと反省している。短いビデオを観ることはあったが、百聞は一見に如かずというようにやはり実際に飼育施設で動物たちがどのような暮らしをし、どのように動いているのか自分の目で確かめなければ何が問題なのか具体的に見極めることは難しい。エンリッチメントの取り組みを考案する上で、問題点がまだあまり動物をみたことがない高校生の想像の範囲でしか考えられなかったことにはもっと留意すべきだったと反省している。当たり前のことではあるが、オンラインでの活動では動物を実際にみずに動物について考えているという変な状況であるのだと今更ながらに気が付いた。今後のオンラインでの活動では、高校生に提示するリソース選びにも注意したい。

良かったこととしては、高校生たちが皆動物園ならではの取り組みを考えてくれたことである。グループ活動が始まった当初は、動物園の動物たちはかわいそうだという意見を持つ高校生もいた。そのため、動物たちが動物園で暮らすことによってどのような利益を得られるのか考える時間をつくるよう意識した。結果として、動物園だからこそできる動物のサポートや高校生のオリジナリティ溢れる意見や発想をきくことができ、私も刺激を受けたことがたくさんあった。

【まとめ】

8月から動物園での活動再開を予定していたが、現状を鑑みると難しいだろう。まだしばらくはオンラインでの活動が続きそうだ。例年とは完全に違った形式になってしまったが、悲観せずに新しい取り組みを考えたい。ここまでのオンラインでのグループ活動は、学部生が興味・関心のある分野をテーマにしていたので、後期には例年と同じく高校生の興味・関心を重視した活動を行いたい。具体的な話はまだ決まっていないが、動物園に行けなくても例年と同じかそれ以上の質のものにしたい。後期の活動では、高校生の興味・関心をより深めて新たに自分自身の動物の見方や考え方を得られるように尽力したい。

野生動物初歩実習レポート

京都大学文学部 2 回生 池田智遥

個別実習の全体発表については、私用によりほとんど参加することができなかったので、それまでの個別実習について纏める形で感想を書こうと思います。当初の予定としては、わたしが個人的に最も興味がある比較認知科学の話高校生と一緒に勉強できればと思っていましたが、想像以上に比較認知科学の人気の無く、(僕の力量不足も大いにあると思われませんが) 文元さんと共同で死生観やジェノサイドについて、主にチンパンジーの死について考えていこうという方向になりました。個人的に、霊長類学実習というかつての枠に未だにこだわってしまっており、比較認知科学のアピールについても霊長類学メインのアピールを続けてしまったことが敗因だったのではないかと考えます。次このような機会があるとすれば、霊長類の比較認知科学だけでは無く、今回人気の鳥や、身近な犬猫などの比較認知科学の研究でアピールしていこうと思いました。それとともに、私は文学部の専修を 2 回生の夏休み中に決めなければならず、比較認知科学を学ぶことができる心理学専修にしようと思っていたのですが、比較認知科学でも霊長類だけでなく、他の動物も研究できる事が分かり、私は野生動物全般が好きなのでこれからの進路を今一度考えていこうと気づくことができました。

個別実習のチンパンジーの死生観についてですが、極力日本語で書かれた論文や報告例をよんでいきましたが、野生化のチンパンジーの死への対応と飼育下のチンパンジーの死への対応を比較したかったので、所々英語の論文も使用しました。読んでくるのは大変だったと思いますが、よく予習してくれていました。私自身、人に物を教えられるほどの知識も器量も足りておらず、また死生観という外的見聞だけでは答えは分からず、結論も出ない話をしようとしていたので、ディスカッション形式で進めていきましたが、少し知識を得て考え方が凝り固まってしまっていた私からは出てこないような視点で意見をしてくれることも多く、自分にとっても実り多いディスカッションになりました。中間発表の前は、チンパンジーの社会性についてを勉強したりしてもらっていたのですが、そのなかで自分の興味を持ったことを発表してもらった際に、様々な興味を持ったことを発表してもらえて、古人の興味を刺激できたのなら、野生動物実習の目標としての仕事はある程度できたのかなと安心しました。最後に悔しかったのは、これから移行する実習で、対象種を考えてもらうときに、霊長類(主に大型類人猿)が上がる気配がないことで、これは自分の伝える力と熱量が足りなかったと反省しております。

「ホウ（法）！動物実験を考えようプロジェクト」を終えて

京都大学法学部2回生 池山 睦衛

このプロジェクトが始動したのは2020年4月25日のこと。法学部生である私が、この「野生動物学初歩実習」のグループ活動としてできることは何かを考えた結果、このプロジェクトを始動しようと考えました。とはいうものの、今だからこそいえますが、当初は様々な不安がありました。法学部生とはいえ、今まで動物と法についての授業など受けたことがなかったため、本当に高校生に満足してもらえるような内容のものが提供できるのか。そもそも「法律」をテーマにしたグループ学習は、この実習に参加してくれている高校生のニーズにあっているか、などなど。それでも、そんな不安に負けているわけにはいかないなと思うようになりました。それは、このプロジェクトを共に進めてくれた高校生4人が、それぞれ熱い思いを持って参加してくれたことを知ったからです。この場をお借りして、共に考え、学んでくれた高校生4人に、感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとう。動物実験を法律学的に考えるということを一度やってみたいな、と思っていたので、今回とても良い機会になりました。プロジェクトは次のような流れで進めました。

- ① 動物実験の良い面と悪い面を知る
- ② 「法」と「倫理」の違いを考える
- ③ 動物を守る日本の法を知る
- ④ 動物を守る日本の法の使われ方を知る
- ⑤ 動物を守る海外の法を知る
- ⑥ 日本の動物実験の現状についてディスカッションする

ここでは、印象に残っている部分について書きたいと思います。①では、動物実験がいかに普段の自分たちの生活と密接に関わっているのかを知りました。そして、普段何気なく使用している様々な物（たとえば、薬や化粧品）の開発の背景には、実はたくさんの動物が犠牲になっているということを学びました。当たり前、しかもそれを幸福として認識しない幸福の裏には、多大なる犠牲が存在する可能性があるということ。これは動物実験を使った何かの開発以外でもいえる話かもしれませんが。そういうことを日々意識して生きていかなければ、と感じました。それでも動物実験は必要と言えるのか、高校生と考える時間を共有し、いよいよプロジェクトの幕開けとなりました。②では、「猿の肉を食べることはアリかナシか」を考えたりし、倫理についてまず考えました。各質問で、参加者の意見が割れたことを覚えています。このように倫理観は人それぞれ違うものです。何を持って正しいというのか、この定義は人それぞれなのだろうと考えました。これに対し、世の中の秩序を維持する法律では、人々が従うべきルールが1つに定まり（その中でいかに法律を解釈するかについての議論があり、ルールの中身に揺れはありますが）、人はそれに沿った行動をすることが求められます。ただし、法がそのように人々の行動を制約するという強力なものであ

る以上、ある程度、人間が納得するものでなければなりません。この点で、やはり法は決して無機質なものではなく、人間臭い要素で溢れているのだなぁと改めて感じました。③～⑤で、日本における動物愛護法について詳しく知った後、日本での動物実験の実施のされ方の現状、海外での動物愛護の現状と動物実験の実施のされ方を学びました。日本だけでなく、海外での現状についても学び、両者を比較することで、日本での現状をより把握することができました。比較という手段は、何かを理解する上で大変有効なものになると改めて実感しました。プロジェクトの仕上げとして行った⑥では、参加者全員の立場が一致したものの、その立場に立つ理由が参加者それぞれに異なっていた点が興味深かったです。その理由は、同じ話題に触れてきたはずの私含め 5 人が挙げる理由が、バリエーション豊かであったことから、人は各々、心に引っかかる部分は異なり、違う頭の使い方で物事を判断しているのだということを感じられたからです。

去年、大学で動物園や水族館での環境エンリッチメントについての授業を受けた後、私はそれまで大好きであった水族館等でのショーをまともに見ることができなくなりました。このショーを自分が楽しめる背景には、動物たちが本来の自然での広々とした生活から離れた、人間の完全な飼育下に置かれている、そうした事実が存在するのだ、と感じるようになったからです。このプロジェクトを終えた今、それと同じような心境になっています。とはいっても、たとえ動物実験が行われるとしても、薬や化粧品などの開発は、人間にとって必要な者であるとも同時に思います。そこで私は、人間がある幸福を享受する背景に、動物の犠牲が存在する可能性がある、ということを忘れてはならないと考えるようになりました。それこそが、動物という、声をあげることができない者たちへの、研究者ではない、私たち一般人ができる一つのことなのだと思います。